

平成25年5月24日

嬉野市議会
議長 太田重喜様

文教厚生常任委員会報告書

文教厚生常任委員会
委員長 梶原 睦也

平成25年3月議会において付託された下記事件の調査結果を、嬉野市議会
会議規則第107条の規定により報告する。

付託事件名 福祉について

調査理由

高齢化に伴い様々な問題提起がなされている今日、本市においてもその例外
ではない。高齢化率は27%を超え、遠からず30%台に到達するであろう。

高齢化の問題として年金、医療、介護などがあるが、その中でも今後大きな
課題の一つになるであろう高齢者の認知症対策について調査を行うこととした。

認知症は脳機能障害による体の病気で、自然な老化現象とは違い医師の診断
を仰ぎ治療すれば改善できるので早めの対応が必要である。

しかし、いざ認知症になると徘徊や奇行など本人や家族にとっては大きな負
担となる。認知症対策は個人だけでは対応が難しく行政のかかわりが重要にな
ってくる。そこで、以前から認知症対策に積極的に取り組んでいる大牟田市を
視察し、本市での対策の参考とすべく調査を行った。

調査の概要

調査日 平成25年4月23日
視察地 福岡県大牟田市役所

調査内容

大牟田市の現在の高齢化率は30.2%で8年前の平成17年が嬉野市の現在の高齢化率と同程度の27%と周辺自治体に比べ高齢化率が高くなっており高齢化に対する危機感からその対策も積極的に展開されてきた。

その中でも認知症対策については特に力を注がれており「大牟田市は認知症の人を支える日本一のまち」といわれている。

介護予防拠点「地域交流施設」

市内の小規模多機能型居宅介護事業所に介護予防拠点として地域交流施設を併設（小学校区に1か所 24施設）

- 1 様々なつながりを広げる場所
- 2 閉じこもりがちな高齢者の方に出かける機会と場所を提供
- 3 高齢者だけではなく多世代間の交流を図る場所
- 4 地域ボランティアの活動拠点、運営推進会議や利用者家族による会の交流場所

認知症コーディネーターの育成

認知症になっても安心して地域で暮らすことができるように専門職・指導者の育成が求められている。

そこで、介護現場の職員に対し、介護方法や対策方法の指導助言をおこなったり、介護家族からの相談に応じるなど専門的知識を身につける「認知症コーディネーター養成研修」を実施している。受講生12名が毎月2日間を2年間受講する。（平成24年6月で76名が終了）

物忘れ予防・相談検診

早期発見・早期対応のために地域包括ケアサポートチームが、保健所や地区公民館で毎年もの忘れ予防・相談検診を実施する。

チーム構成は地域包括支援センター・物忘れ相談医・認知症専門医・認知症コーディネーターとなっており、症状によってはすぐに専門医が対応する。

教育現場での認知症に対する取り組み

認知症を正しく理解し、認知症の人の気持ちに寄り添い、みんなで支えあうまちをつくるために、子供たちと学ぶ認知症「絵本教室」を実施、平成16年

全小中学校33校のうち4校（小学校2校 中学校2校）から平成24年度は21校（小学校11校 中学校10校）が実施している。

ほっと安心（徘徊）ネットワーク

- 1 認知症の人と家族を支え、見守る地域の意識を高め認知症の理解を促進していく。
- 2 徘徊高齢者を隣近所、地域ぐるみで、多職種協働により可能な限り声かけ・見守り・保護していく実効性の高い取り組みの充実。
- 3 認知症になっても安心して暮らせるために「徘徊＝ノー」ではなく、「安心して徘徊できる町」を目指していく。

この理念のもと、市内の警察をはじめ消防・郵便局・JA・タクシー会社・各駅・薬剤師会等々と連携し「大牟田地区高齢者等SOSネットワーク」を構築している。

徘徊SOSネットワーク模擬訓練

大牟田市では徘徊行方不明者をできるだけ早く安全に保護するため、また、誰もが認知症を正しく理解し、徘徊時の本人の気持ちに配慮した声かけや見守りができるように現実に即した訓練を平成16年から実施し、昨年は第9回目の訓練が実施された。

訓練では徘徊者役が、市内を模擬徘徊し訓練参加者が搜索をする。校区によっては独自に搜索隊を組んだり声かけ訓練を行ったりと、参加した校区がそれぞれの実情に合わせた取り組みを展開する。特に、大牟田市では高齢化が進んでいるという現状に合わせ、「認知症」を切り口とした徘徊模擬訓練等を通じ地域ネットワークづくりが進められている。

模擬訓練では同時に認知症サポーター養成講座も行われており、今回だけで730名の受講者となっている。

また、この模擬訓練への視察も募集されており多くの視察もあっている。

委員会の意見

本市における認知症者については、正確な数値は確認されていないが施設等からの報告をみれば相当数の発生があると考えられる。

認知症は早期の取り組みが必要であり、予防・早期発見に取り組むことが重要ではないか。

本市においては「脳力アップ教室」等を開催し介護予防に努められている。

また、早期発見・早期予防については民生委員や医療機関、サービス事業所との連携で取り組まれているが、大牟田市のようなもう一步進んだかたちの認知症の専門家や専門医による定期的な相談・検診事業等や、また、子供たちに対する認知症教育も含め高齢者への理解を深めるための教育も必要である。

大牟田市では、認知症の中核症状や行動障害の姿といった「マイナスイメージ」ばかりでなく、私たちがこれまで出会ってきた認知症の人の愛情に満ちた姿や想像を超えた豊かな力、「人が生きて暮らす」ために必要な家族や地域とのかけがえのない絆についてユーモアやファンタジーを持って伝えているとのことであった。このことについては、本市の教育現場でも参考にすべきであろう。

徘徊SOSネットワーク模擬訓練については、普段から関係団体はじめ地域や多職種協働の認知症に対する連携が出来ている故に出来る訓練であり、本市においていきなりこのような訓練ができるものではない。

それ故に本市においても認知症対策の一環として、このような実践的訓練ができるよう関係団体とのさらなる連携を図るべきである。その一環として本市においては平成21年度より講座を開催し、現在757名の受講があるが、認知症サポーター養成講座をもっと活用していくべきと考える。

今後は、更にキャラバンメイトの育成も含め拡大に努めるべきである。

いずれにしても、認知症対策といっても高齢者対策の中の一部門であり、より広範な角度で取り組まなければならないことは言うまでもないが、認知症本人や家族の支援にはより一層の対策を講じていく時期に来ていることは間違いないことだといえる。